

第8回 石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ 議事概要

日 時：令和2年2月7日（金） 15:00～17:00

場 所：南幌町生涯学習センター「ぼろろ」3階研修室

出席者

矢部 和夫（札幌市立大学 大学院 デザイン研究科 教授）座長

尾暮 靖志（南幌町 都市整備課 課長）

浅野 茂（南幌町 教育委員会 生涯学習課 課長）

木村 浩二（雪印種苗株式会社 環境緑化部 緑化事業課 自然環境グループ）

新田 紀敏（北海道立総合研究機構 森林研究本部 林業試験場 森林環境部 主任主査）

市川 裕章（赤平オーキッド株式会社 部長）

近藤長一郎（NPO法人ふらっと南幌 代表）

橋本 壮吉（NPO法人ふらっと南幌 事務局長）

鈴木 玲（石狩川流域海岸・水辺・湿地ネットワーク 代表）

矢部 浩規（寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 寒地河川チーム 上席研究員）

松田 泰明（寒地土木研究所 特別研究監付 地域景観チーム 上席研究員）

岩田 圭佑（寒地土木研究所 特別研究監付 地域景観チーム 研究員）

松原 寛（札幌開発建設部 河川計画課 課長）

林 利行（札幌開発建設部 江別河川事務所長）

■幌向自然再生事業の現状

（1）事業の進捗状況

幌向自然再生事業は平成27年からスタートし、遮水整備、湿生植物やミズゴケの導入、地域連携活動を行ってきた。事業完了年は令和6年度を予定している。

（意見交換）

- ・湿生植物の導入が目標株数に達していない種については、自然状態で育苗しているため、今後の育苗状況によっては、R1年度で完了予定としていた初期導入が1～2年遅れる見込み。中期導入は予定どおりのスケジュール見込み。
- ・タテヤマリンドウ、ラン科植物（特にカキラン）など、後期導入種の一部は、育苗手法の新技术を開発している段階。後期導入種は元々湿原の中で生育が少ない種が多い。

（2）全国初のボグ形成に向けた道のり

幌向自然再生の取り組み経緯について、湿生植物・ミズゴケが定着しやすい場の整備、湿生植物・ミズゴケを増やす、仲間を増やす、居心地の良い空間づくり・維持管理などを行ってきたことを紹介。

（意見交換）

- ・サロベツ湿原のように、湿原再生の取り組みは全国各地で行われているが、多くの事

例は、元々そこにあって劣化した湿原を再生する取り組みである。幌向再生の取り組みは、元々そこにあった湿原の再生ではなく、新たに創出しようとする取り組みであることが大きく異なる。そのような事例は国際的に見てもない。

- ・湿生植物の育苗技術について、ヤチヤナギなど、香りづけの材料にするための作物や庭の花として育てる技術はあるが、湿原環境に植える技術は前例がない。この取り組みの中で技術を確立できるとよい。
- ・仲間を増やす取り組みについて、地域の人にとっては、ここが湿原になるということ学習として知ってもらっている段階。もう少し将来の姿を見せられるとよい。

(3) 事業完了年に目指す姿

会場と意見交換を行いながら、R6年度に想定される姿について参加者と共有した。

(意見交換)

- ・ミズゴケは、オオイヌノハナヒゲの根元等、日陰になる箇所には生育すると思う。これまでに導入したミズゴケを見ると、3~5年で成長するので、R6年度にはそれなりに拡大している。
- ・目標とする植生を妨害する最大の課題として、堤防付近に生育するオオハンゴンソウの影響を考えておく必要がある。
- ・なぜ再生地には導入種しか生育しないのか分かってきた。下流側の泥炭は表層 1cm 程度が強く乾燥している。上流側はオオイヌノハナヒゲ等の種子が発芽できる水分環境ができるように設計した。下流側の泥炭は乾燥が強いので、種子は発芽できないが、根を持つ植物を導入すると表層 1cm 以下の水分を吸収できるので導入した植物だけが生育している。

(4) 取り組みの意義と湿原の魅力

今までの取り組みのおさらいとして、南幌町の発展の歴史を鑑みると、南幌町そのものを知ることができる本取り組みを10年、20年先まで関わり続けることが、取り組みの意義と思う。また、湿原の魅力には、①学術的な価値、②学び・楽しみ・知的好奇心、③地域産業への寄与という3つの面がある。

(意見交換)

- ・学び・楽しみ・知的好奇心について、小中学校の理科の先生がサークル活動を行っている。そのような先生方に取り組みをPRできるとよい。また、南幌町の歴史は水害の歴史というイメージが強く、元々湿原があったこと、湿原を再生する取り組みを行っていることは、町内には浸透していない。そのギャップをどう埋めるかが課題。

- ・取り組み自体に価値がある。ゼロから始めてようやくここまで来ました、10年後にはさらにここまでいきますというように1つのストーリーとしてまとめられる。また、ここに来ないと見られないような希少性の高いほろむい七草もある。そういった2つの大きな魅力がある。湿地フォーラムなどの機会を使って、来てくれた人にPRできるような魅力を整理するとよい。

■将来像の共有化に向けて

将来像の目指す姿として、①学術研究の場とすること、②地域の活動・学習の場とすること、③多くの人が興味を持って訪れて、原風景を体験できる場などの利用が考えられることを紹介。

(意見交換)

- ・ここで地元の方がかかわって、ここは自分たちが造ったところだ、みんなで世界初の試みに関わったというふうになれば一番よい。地元の学校とか地域の団体とか農家の方が苗を育ててどんどん植えていくということを、観察会と並行してやれると、自分たちが造ったすばらしい場所だというふうになっていくと思う。
- ・この取り組みは、「湿原そのものの価値」に加えて、「取り組みそのものの価値」がすごく大きい。ここまでの数年の取り組みは、胸が張れるすばらしい取り組みだと思う。
- ・外からの応援も当然大切ですが、地域の方々にどう発信していくかというのは非常に大切。次の時代の子供たちにどう伝えるかというのは、興味を持たせながら、単に湿原だとか環境だけではなくて、この町はどのような歴史の中で町ができてきたのか、自然と人の営みがどういうふうに相まってきたのか、歴史の中で湿原はどのような存在だったのかというストーリーを作っていくのが非常に大切。
- ・南幌町は水害の歴史というイメージが町民には強い。町民に現地を見てもらえる観察会などを開催できるとよい。

以上